

海外論文の紹介

「ドイツ環境医学誌」

(臨床環境7:93~94, 1998)

(Zeitung für Umweltmedizin Heft 2/1998)

ドイツにおける化学物質過敏症 (MCS)

— 健康保健医療業務でMCSが保健適応されるための方法

— これまでの医学常識を大きく越えたアルテンキルヒ教授の論文 —

大学医学に求められるのは、学問的知識に基づき、本当に意味がある医学とは何かを見極めることである。この医学は、いわゆるオピニオンリーダー達によって大学で教育され、また教科書や専門誌を通じて公にされている。その次に重要視されているのは、大きな病院の主任医師達の意見である。しかし、病人を初めに診る開業医らの意見は、あまり認められておらず、オピニオンリーダー達の支持を受けなければ、物笑いの種になりかねない。

健康保険医療業務 (MDK) は、大学で認められている医学に基づいて査定が行われている。それゆえ、大学で認められている医学とは異なるもの、例えば慣例となっていない医療行為の多くは、保健が認められていない。この査定は大学で認められている医学に基づいていて、そこには化学物質過敏症という疾患名は、存在していない。そのため、もし患者が経験に基づいた医学や、あるいは検査によって MCS と診断されたり、あるいは疑われた場合に、いったいどうすればよいのかという問題が生じてくる。患者はこの疾患によって重大な障害があることを認めてもらい、その保証や保健を適応してもらおうとするであろう。

保健を適応してもらうためには、基本的に次の2つの方法が考えられる。

1. MCS という診断名をやめて、既存の診断名に変えてもらう。典型的なものとしては気管支系過敏症、気管支喘息、機能的胃腸障害 (たとえば過敏性大腸炎)、心身症、うつ病、パニック発作、Fibromyalgia (線維筋肉痛) などがあげられる。これらの診断は専門医によって確診されるべきである。
2. MCS の診断がつくという希望を持って、ドイツの数少ない環境医学医を受診する。ただし、他の専門医によって、MCS の診断が否定される危険性がある。

実際には、最初の方法が現実的な方法として、選ばれている。しかし、MCS が認められるべきか、あるいは除外すべきものであるのかについて知りたい方々のために、ある大学医療に携わる医師によって書かれた科学論文を、以下に紹介する。

客観的検査は役に立たない

アルテンキルヒ教授は、ベルリン・シュパンダウの神経科の主任医師であり、またドイツのいろいろな研究機関の権威ある指導者である。アルテンキルヒ教授は短いページではあるが、包括的にしかも詳細に最近の医学の学問的見解を、いろいろな対立する意見もとりあげながら述べている。彼はこの中で、MCS はいろいろな症状を持つ機能障害であり、客観的方法 (たとえばレントゲン検査、内視鏡検査、ラボ検査) で、器質的变化をとらえることは困難であると述べている。

これらの患者は多種類の環境汚染物質に対して反応しており、その一部は異なった症状を示す。MCS の診断が難しいのは、それが MCS であるかどうかを知る検査方法がないことにある。医師はたいていの場合、患者の自覚的訴えだけを頼りにしている。

MCS の発症メカニズムは様々に解釈されている。複数の環境化学物質によっておこるその反応の幅は、軽度の精神的興奮から器質的な病気にまでと多岐にわたっている。アルテンキルヒ教授は、MCS は従来

の意味での中毒疾患ではないと、確信している。なぜならば彼が診た患者においては、中毒学的にも神経学的にも異常を確認できなかったからである。

これらのことをまとめると、MCS はもともと臨床環境医学者達（特にT. ランドルフ）によって、一種のアレルギーとみなされてきたものではないかという考えが当てはまるかも知れない。この見解は50年以上も前からあったものである。現代の臨床環境医学はむしろ中毒説を考えているが、一方現代の大学医療のアレルギー学者達は、MCS を精神疾患と捉えている。ある臨床経験に基づいて、典型的な MCS の症例報告が掲載されたが（Allergo Journal、1996年5号439頁）、これはダイエット中に用いた栄養剤の不耐性からおこった症例を扱ったものであった。

この論文の注目すべき事は、アルテンキルヒ教授がともかく MCS の診断を下していることである。これは大学の医学体系を持つ病院にとっては、異例のことである。更に注目すべきこととしては、パレスロイド曝露による8例の患者にさかのぼって、MCS の診断をくださったことである。この見解は大学の医学常識を大きく越えていた。さらに、この数名の患者を介した重大な新しい見解の公表は法律上の問題もあったので、理解しがたいものに映った。なお念のために付け加えれば、この論文では、治療に関しては特に触れていない。

しかしこの発表は、MCS について書かれている論文の中で、自身の信じるところに基づいて書かれた最も明解な論文である。この論文は、病人、その親族、医師、そして法律家にこれから方向づけと論証の助けを与えている。

Altenkirch, H.: Multiple Chemical Sensitivity-Syndrom-ein neues Krankheitsbild? In: Der medizinische Sachverständige. o.O. 1997. Heft 93. S. 63-67.

Korrespondenzadresse:

Priv.-Doz. Dr. med. Dr. rer. nat. Th. Hurter,
Internist, Konrad-Adenauer-Str. 86,
52511 Geilenkirchen

翻訳者 阿 曾 香 子
(北里大学眼科助手)

翻訳者 注: 米国に遅れてドイツにおいても化学物質過敏症の保健診療の問題が浮かび上がってきている。ドイツでは保険会社が保健業務を代行していて、本邦とはまったく異なるが、化学物質過敏症の認可してくれる会社とそうでない会社があり、トラブルを引き起こしている。